
種生物学会 News Letter No. 15

The Society for the Study of Species Biology

種生物学研究編集委員会編集

1997年7月31日発行

第28回種生物学シンポジウム報告

第28回種生物学会は、2月28日～3月2日にかけて、つくば市の「青木屋」で開催された。プレシンポとシンポジウム1では、農業環境における生物多様性を考える目的で、7つの講演をお願いした。また、シンポジウム2では樹木における萌芽の役割を生態学的観点から考える目的で5つの話題が提供された。プレシンポとシンポジウム1では、農業生態系における生物多様性を考える上で、「景観」レベルからの話題提供として、農環研の守山弘さんから農村における種多様性が屋敷林、田畑、二次林などの景観構成要素の面積や配置などに見られる一定の規則性に関わりをもって存続してきたことが報告された。高橋佳孝さん（中国農試）と梅本信也さん（京大）には「群集・群落」レベルからの話題を提供して頂いた。高橋さんは半自然草地における管理と種多様性との関連及びそこに生育する稀少植物の現状と保護対策について島根県の三瓶山などを例に、放牧、火入れ、採草などの人為的管理を取り入れることが多様な生育環境を維持する上で重要であることを指摘した。梅本さんは、日本における水田畦畔型の分布を形態、植生、管理様式などから分類し、それらの地域特性と適応性についての話題を提供して頂いた。「種・個体群」レベルからは、在来植生を改変する要素として問題となっている外来雑草の進入とその特徴に関して、清水矩宏さん（農環研）は、輸入飼料に混入して様々な雑草種子が多量に持ち込まれ、日本国内に拡散している現

状を報告し、今後それに伴う在来植生への影響や近縁在来種への遺伝的影響などの可能性を指摘した。また、渡邊幹男さん（愛知教育大）は、帰化植物のセイヨウタンポポの分布拡大メカニズムについて、セイヨウタンポポとニホンタンポポの酵素多型の解析を行い、セイヨウタンポポが交雑によってニホンタンポポの遺伝子を取り込んで、分布を拡大している可能性のあることを指摘した。「種レベル以下」の話題提供として、汪光熙さん（東北農試）はミズアオイのスルホニルウレア系除草剤抵抗性個体の出現について、繁殖特性とそれからみた抵抗性の拡散について報告した。また、最後に工藤洋さん（都立大）は、雑草集団内にどれだけの遺伝的変異が保有されているのかという疑問についてタネツケバナの開花性に見られる地理的変異に注目し量的遺伝学的手法を用いて解析した結果を報告した。今回のプレシンポ並びにシンポジウム1では、上記の4つのレベルを相互に（何とか）結びつけ、農業生態系における生物多様性研究の方向性を探りたいという意図で企画したものであるが、改めてその難しさ感じた。ただ、今回の講演を聞かせてもらい、対象とした農業生態系における生物多様性は、人間の活動によって創り出されているという印象を強く感じた。（松尾和人、農環研）

会役員の任期とのずれを修正するため、1年間に限り現委員会で編集業務を遂行し、次期は新編集委員を推薦することになった。それに伴い、編集委員長も現委員長が

1年間に限り継続することになった。種生物学研究第21号は編集作業が順調に進んでいるので、秋には配布予定である。

書評

植物解剖学入門 – 植物体の構造とその形成 –

ポーラ・ルダル著 鈴木三男・田川裕美訳 八坂書房 ¥2600

ISBN4-89694-696-0

光顕、電顕のきれいな写真がたくさん入っていて、見て楽しめる本である。全体に羅列的ではあるが、巻末の用語解説も充実していて植物形態学の入門書として親切でわかりやすい本だと思う。

この本を、読むというよりはぱらぱらと写真を眺めながらめくって興味のあるところを拾い読みしていると、大学に入ったばかりの頃の教養の生物学実習を思い出した。この本のように体系的に植物全体の形態を観察したわけではなかったが、茎や根の薄片をプレパラートにつくり顕微鏡で観察する作業はそれまで気づきもしなかった世界を目の前に展開してくれるので楽しかった記憶がある。苦手なスケッチは苦痛だったが、顕微鏡で拡大してみるということはそれだけで結構面白い。しかしもちろん、ただ拡大して喜んでもらうだけでは実習にならない。その組織や器官が持つ機能が何なのか、そしてその機能を果たすために植物の体がいかに巧妙にできているのか、を考えるのだ。複雑なようでもあり、単純なようでもある植物の組織形態の機能的・適応的な意味を考えるのは形態学のおもしろさのひとつであろう。実習ではさらにいろいろな分類群を比較して、同じ役割をする器官でも非常に多様に分化していることも学んだ。分子系統学の発達により、形態から系統を推定するのはナンセンスだといわれる今日だが、形態と系統を結び付けてあれこれ想像を巡らす楽しさには変わりがないと思う。むしろ信頼度の高い分子系統樹の存在によって、想像が単なる妄想だけに終わらない可能性があるぶん、おもしろみが増したともいえるかもしれない。

著者は序言の冒頭で「植物解剖学はたいへんおもしろい分野である」という。けれどもこの本はおもしろさを発見するための基礎知識を正確に伝える、という入門書としての目的だけのために書かれているようだ。ところどころおもしろそうな匂いのする部分もあるけど、ここに書かれていること自体がおもしろいわけではないと思う。ここに書いてあることを知ってたら次にどんなおもしろいことがわかるのか。入門編の続編としてそんな続きの話を読者の鈴木さんに期待してもよいだろうか。

(大阪府立大・総科 副島顕子)

1996年度収支決算報告書（1996.1.1-1996.12.31）

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費	3,807,708	印刷費	
購読料	247,793	PSB Vol.10(2)	593,280
別刷り	341,135	PSB Vol.10(3)	565,470
利子	1,139	PSB Vol.11(1)	1,490,410
国際シンポジウム残金	309,970	封筒	49,440
借り入れ	300,000	別刷り代金	167,478
		通信費	
		会誌発送 Vol.10(2),11(1)	189,930
		その他	205,460
		事務費	39,117
		編集諸経費	47,309
		事務補助謝金	420,000
		雑費	6,963
		シンポジウム補助金	100,000
		返済	300,000
小計	5,007,745	小計	4,174,857
前年度繰越金	70,667	次年度繰越金	903,555
合計	5,078,412	合計	5,078,412

上記の収支決算と内訳明細表・預金通帳・証書類を照合した結果、
1996年度の会計報告を適正と認めます。

1997年2月22日

会計監査委員

小菅桂子

鈴木 武

1997年度 種生物学会予算

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費（1997年分）	3,359,000	印刷費	
会費（未納分）	534,000	PSB 11(2-3)	1,000,000
購読料	464,000	PSB 12(1)	650,000
バックナンバー売上金	10,000	PSB 12(2)	650,000
別刷り代金	500,000	PSB 12(3)	650,000
預金利子	5,000	種生物研究 20	500,000
超過頁等著者負担	348,000	種生物研究 21	400,000
		Newsletter 14,15,16	65,000
		封筒印刷代	70,000
		別刷り代金	400,000
		通信費（会誌発送）	330,000
		通信費（原稿等）	250,000
		事務費	50,000
		雑費	30,000
		シンポジウム補助金	100,000
小計	5,220,000	小計	5,145,000
前年度繰越金	903,555	次年度繰越金	978,555
合計	6,123,555	合計	6,123,555